



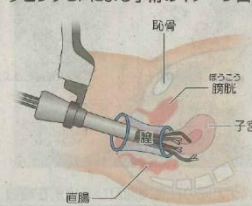
婦人科手術 支援ロボ駆使

倉敷成人病センター・安藤正明理事長



モニター(左上)を見つめ正確な手術をする安藤理事長

ダビンチSPIによる手術のイメージ図



手術台(左)と操作台(右奥)は離れた場所にある



あんどう・まさあき 岡山朝日高校、自治医科大学医学部卒。1986年から倉敷成人病センター勤務。2019年から理事長。日本産科婦人科学会専門医・指導医、日本産科婦人科内視鏡学会技術認定医・指導医、日本産科婦人科学会婦人科腫瘍専門医・指導医、日本内視鏡外科学会技術認定医(産科婦人科)など。

腔から鉗子挿入

術後の回復早く

倉敷成人病センター(倉敷市白楽町)は婦人科の手術で手術支援ロボット・ダビンチを駆使している。昨年4月に最新の機種を導入し、腔から挿入するロボット手術を国内で初めて取り入れており、全国屈指の治療実績を誇っている。最先端の治療の様子とそのメリットを紹介する。(二羽俊次)

子宮内腫瘍の一種である子宮腺筋症を患う患者の手術。カンユウと呼ばれる金属製の筒(外径2.7cm)を通し、カメラと鉗子で腔内に入る。これらは全て本のアームから伸びている最新型のダビンチSP。1カ所に穴を開けるだけで鉗子とカメラを体内に挿入できる。その機能を駆使して腔から挿入すれば、傷を全くせずに済むわけだ。

安藤正明理事長(婦人科専門医)が手術台から離れた操作台(コンソール)に向き、その姿は画面には腫瘍の鮮明な拡大画像が広がる。両手の親指・人差し指・中指とカメラを動かす。鉗子とカメラを遠隔操作する。足元の操作盤

を踏んで、動かす鉗子で巧みに切り取る。ほころび子宮、子宮直腸の間の開き、子宮を摘出。将来の病気のリスクを下げるため、卵巣も切除した。最後に腹膜と膈を縫い、約1時間半の手術を無事終えた。

その年の6月、ダビンチSPを使用し、腔から鉗子挿入する。とで体に穴を開けなくてもよい。最新のダビンチSPが2023年1月に国内で初めて導入された。同4月に国内で8番目、近畿以西ではトップを切った。

安藤理事長は「鉗子の関節可動域が自分の手よりも広く、しかも繊細に動く」と評価する。患者の術後の痛みは早く、出血も少なく回復が早いのがメリットだ。ただ腫瘍もある。ダビンチを使った婦人科手術で保険が適用されたのは、子宮筋腫、子宮内腫瘍、早期の子宮体がん、子宮がん、子宮全摘手術と4種類。子宮がん、子宮全摘手術と4種類。子宮がん、子宮全摘手術と4種類。

安藤理事長は毎日30分、ダビンチのシミュレーターを使った鉗子の操作練習を日課にしている。腹腔鏡で血管を結ぶ動作も25年以上、毎日3000回行っている。

安藤理事長は「ロボット機器はどんどん進歩しており、さらに低侵襲の手術が可能になるかもしれない。その能力を最大限に活用できるように、優れた技術を持つ医師を一人でも多く育てていきたい」と強調する。

ダビンチの専門医を認定しており、安藤理事長は婦人科で国内唯一の「国際A級ライセンス」に認定。続く「国際B級ライセンス」は国内に4人いる。このうち2人はセンターの柳井しおり、吉野瀬の岡田恵。岡田恵は4人いる。

中国、九州では唯一のダビンチによる婦人科手術の見学会も開催されている。

安藤理事長は「ロボット機器はどんどん進歩しており、さらに低侵襲の手術が可能になるかもしれない。その能力を最大限に活用できるように、優れた技術を持つ医師を一人でも多く育てていきたい」と強調する。

安藤理事長は「ロボット機器はどんどん進歩しており、さらに低侵襲の手術が可能になるかもしれない。その能力を最大限に活用できるように、優れた技術を持つ医師を一人でも多く育てていきたい」と強調する。

安藤理事長は「ロボット機器はどんどん進歩しており、さらに低侵襲の手術が可能になるかもしれない。その能力を最大限に活用できるように、優れた技術を持つ医師を一人でも多く育てていきたい」と強調する。

倉敷成人病センターは四半世紀もの間、子宮全摘をはじめとする婦人科系疾患で患者の負担が軽い低侵襲手術に取り組んでいる。ダビンチの活用もその延長線上にある。センターが手がけてきた低侵襲手術の歩みを振り返る。

低侵襲手術 四半世紀実践

ある子宮内腫瘍が直腸や尿管の中にできた場合は開腹手術をするのが一般的だが、センターは腹腔鏡で対応している。これまでの腹腔鏡での手術実績は計2万6000例を超える。腹腔鏡、ロボット支援などによる低侵襲手術は98%に上る。

子宮頸がんに対して子宮体部を残し頸部のみを切除して妊娠の可能性を残す子宮温存手術を2000年に国内で初めて導入。これまでに妊娠、出産を望む約100人が治療を受け、約40人が出産に成功した。

ダビンチを導入したのは13年。23年度は良性疾患、がん、骨盤臓器脱で計799件の手術をした。

おなかを切らない腹式手術を1986年から9000例以上実践。2019年からは、おなかに傷を付けない点は同じだが、内視鏡を使うためさらに痛みが少ない経膈腹腔鏡下手術(vNOTES)を行っており、こうした経験がダビンチでの手術にも生かされている。

21年にはロボット先端手術センターを開業。安藤正明理事長が初代センター長に就任した。

センターは婦人科手術に関する無料のメール相談や電話相談(080-2947-3673)を平日午後2時~4時に受け付けている。

次回は7月1日付です。過去のメディカ掲載記事をはじめ、岡山県内主要病院の医療・健康ニュースは山陽新聞社のホームページ「岡山の医療」

健康ガイド MEDICA(https://medica.sanyonews.jp/)でご覧いただけます。スマートフォンからはQRコードをご利用ください。

